特別
チ12
3656
15

次オ

ハ重成塩谷乃うら浪ハ重乃
塩谷のうらなす九重にいとや
うへらん　詞　是ハ左中将清経乃
御内ニ仕へ申淡津の三郎とや
君さてしんねも飛来てん清経ハ
ゑふし築紫乃軍ふうちまの置
たまのひ都へハ迄帰らぬ為筆討

412
3656
15

<97-181>

敷妙乃をかくしらんとまわ
思ふ君が園梅のうつろ
神ろて更りし月の英毎よわ
ま玉投むあくなわ竹ひてん
又瓶中をんたひまきハ侍うさこの
ふこふ鬢乃髪をかうつ置まそ
ひ侍ようひあきハ侍形見をもち

吹ヶ敷へ上ぶ人　左行上七
二　住居て別こてゞく遠うへ侍
二　故ゞ乃者計まよ別うへてらい
二　ものうき秋者てしや何面ハ侍
二　接衣志ほ侍く袖敷ま乃そ城
二　思ひくふ上ぶ人ろわくこ志ん
二　雅ふ見はくや敷ふ見てんいふ

二　住居て別こてゞく遠うへ侍
二　故ゞ乃者計まよ別うへてらい
二　ものうき秋者てしや何面ハ侍
二　接衣志ほ侍く袖敷ま乃そ城
二　思ひくふ上ぶ人ろわくこ志ん
二　雅ふ見はくや敷ふ見てんいふ

薬内中ん漢はの三郎か集てゝん
ゟ神く清すん　何あり清乃
三郎と中かあし孫しや人さも
あし其方へ来わりん相味そい
なすま致たあ乃清使まそしあるう
さらんはかくと中さ要ぬ兜とい
来わてゝん其はと中あくへ参

やゝ要お役をわ義さらんには
あらかしきうやなすまとそ抱まい
中さそてさあくと清う　さ要ん
面目もなすな清使ふ業まそん
面目もあさき清使とは多清道世
ふてさか　りや清道世まそしあ
清塗なすくは　色まし清くし乃

軍まも法法〻のなぎとろうや
法るふ　まを人るとよ一葉さ乃
軍まも法法〻のあく人ひ一の
法強さ秋よ北ほ一めはやうい
おへいとてもうへらわ乃堂乃
敷兵乃多よかくらんまわとと
思ふまき学国の巻お国柳の国乃

沖ふて更行月乃東ゆよわ
月秋投むあくなわひては
ツヒ上カんし
何月をあけ空くなわ竹ひふる
とやうめやをい対き
も巻又やまふ乃原武霞とも
清おすき竹うこもはる
へ巻ふ我と月秋あけ竹ふ事

いつはりなかりける事とかや
実にかへるもうつひなき世と
なるこそうらめしけれども
羨なまわりける世中に此程ハ
人目をはゞむわがやどのく
みききかはしきゝ風の聲にも
それは思ひ絶よなくのかん隙

みなの袖ともそい袖をゝの
さ明月のすゝしさは思りん
かとくあれ名をもかくさそ明
書かく　又社字を見をまい
法形見の志なく小鬢か髪を
乃こし置ませ人見をはゞしさて
清らく袖を多くさめし秋人

トノヒキ

う祝い中は殿のくろうとうや
う祝い同もくれぬきえなをも
思ひのまのさら所ろうやろうひよ
心はく祝賀なれいうきまろう
通すえと乃屋ろくと　色向
通してよもすうう源とくふ
おもひ祝乃夏なわとものく

紙へと祝うぬるようくふ
花やうひ色ちくひうんく
ミテサシ
皇人ふ夏なまきあけて祝と
見る服裏ろとるあけて三東
すかく心頭色事すて一生
ひろくきやうとろ世も
夏侍うくと思ふもまかろ乃

何まで語あるゝ雲水乃行も悔るも
涙浮乃なくてまたと海きこ袖乃
きろ出きようて旅ふ出しき
人を見てしより夢てふものは
形ミろめてきいのよりし八人
ツヒ上ケル
きよつねこそまゐりて候へ
ふしきやまとろむ枕にみえ

給ふハ実清経にてましますぞ
恨めしく身を投けたまへはり
下
ゆめならてハいつこ見ゆへきを
よし夢なりとも清経を見え
給ふあらうこときこそわなうら
恋しきまゝにてわれと身を捨さるを
給ふ清経をいかりるをなわやる

ーーーーーヽヽーこーーヽヽに
りうしとなる我ハ昨日めしうんな
ヒニ上カル
ーヽヽーーこーーヽ
さやうま人をもうしミ行はく
こヽヽーーーヽーこー　詞
我もうしミいまの見よとの
をくまーうしミをいかまーふ
うへさを行ふらん　四上カル　いやとく
こーーこーヽこーーヽー
形見を返すとは思ひあきらまし
ーーーヽ下ーーーヽーー
ことの葉は思ふうひまちうくは

ノヽヽーこヽヽ
はくし我髪を我ハ　三ノ羽　守佐まう
返れはもとの庵しるまとさしも
なくまーしくろのミのあるれい
とせハ葉の形見うし　四上カル　をろを
こここーここーーこーーこー
われは行へ帰やなくきめとも乃
こーこ下ーーヽヽ一九ヽーーーー
形見なきとも三ろ神ハ越えひ乃
ーーーーーーヽ　手付
やん大ま三つミ　わきへをくまし

りひもなくうさこ戀のへすい
ツレ
吉郎さ科うし見　我い抱すし
氣乃うし見　たうひまのこち
ツレ
うこたると　うさ見うはうさき
ツレ
黒髪乃　うう三戀きんまいひ
そへてぐぐく結る縁乃手枕を
なすへてゆさ道り逢瀬な袖と

恨むまいひとわ結乃ゆうく
なる身うも一きをすや影見えう
中こうけまこ袖なくい忘るこ
ことものなんと思ふもぬうれ
たえとうなく　いまし　へ乃
事　せ讒はそきこのをやん西し
とい恨三を流り袖人　桜も

九州山京乃城八もうきよ勢
来ぶとゆし程よと所ものも
とわあへしよもしうたうを
みまよとわ乃ぶてそお国柄と
り月ここここ
り所ふぶく　実や所もなし
えたる歌いなすこ来ぶ柄ぶいと
但初の皇居をきたむう柄よわ

宇佐八幡ふぶ宗務ゆ面とて
神馬七疋ゆ亀鶴程こ武柄柄
ゆし上カル
多賀神社なる所面　か撰よ
ゆさハなをも分ぶ仰こよ柄る
事分飛ともきしうふいもこ
君まのしまの代乃きのひや
一つ乃そをもしして徒よ

ほかひとわをねかし事はよ
よしなきさたよるふ　く[illegible]く
これも法理をきらめかしなれ祢ぎ
なまなる世乃孫の告語申さんきて
給へ　神宇佐八幡ニ宗廟し
横く祈祭[illegible]られ数乃た乃ミを
うけきのくもふさし　きさふくも

ミとしろ乃縁起内よりあらた
な[illegible]法[illegible]をあしてかくたうわ
世中於宇佐ふは神もあさき拙を
何い乃[illegible]らんたう[illegible]はくしに
さうわともと思ふ心も出於[illegible]も
よりつの果めふ秋乃[illegible][illegible]　[illegible]い
仏神三宝も　神果たまのふと心

かくて一つはきぬうしなひ
ちるを捨てゝあしよい車に
すこしと筆章なし葉は募
あすへとて横　かくまくる家の
也門園へも歎向ふとゆしつは
又舟のとわの里ていたくとも
なく押出は心のうちう募なる

実や世中の積る篆らう海しと
なま達保元乃乱の花寿永の秋の
落葉とちりまくふなわ浮ふ
一葉の舟のかみや柳かうの
秋風乃追手うかなるあとの浪
志つむとまき心むまの涼松に神は
源氏の旅ならひは也嘗みかと

行をきはまりなき清躍はうろよ
こめておもふやうさ感ずるも
ハ幡乃法話宣あらふ心魂よ
乃こゝろとりは海と正直の
のうへにやとわ祈ふうとたま
一筋よ思ひとわ　あちきなわ
ゆきゆへ来の法垂孔乃成祈をき

うかふうまくそけ波浪よ海に祈
わもよたゝよひて居まそう
うまめ成多乃流さそせと
思ひきわ人ふはいそ岩代乃
まつすあわやあり法きに月よ
うそあくきしきみそまも乃
垂いくこのたちあるまきしわ

やうてうぬきいたし吉あすミ
やうふふ裳なしいさやうを
うらひ龍躰しうしうさり宗在
かくみそ躰ふはい清るあさ渡お
海らぬいいすし八とまのうぬい
こゝろはしよ逢世とても捨う
しあうおもひのこさんやと

鵜舟めうりいひたち極人と
人やみろうらんよしひとは何せ
みろうめ手うわ於よ御の定西よ
うらみくちき手う伊い吹きや
中まゝ清まさと南無阿弥陀仏
弥陀如来むのへさきたまへと
たゞ一おう誠實はまさ無よわ

この浦々と海幸の夜船見くらべと
志賀を越く浮み出る果うの雲
少し心もくれたるとわうき旅ふ
沈む波の面乃眺めうわくる
歎くうゐ　いうかくく奏海も
同うさうさ於あはれ名残も
のりくさうわくわさて備後名に

音連れぐ〻ふきはゝ激あめい
矢さき月い清波ゝ山ハ鈴城雲形
旅を住いて情懐於波を掘八
彩見の服乃ひわ美形とのいち
通雲乃姫連明も仏性も私侍し
うくさうい波ひくいうか
西海四海乃国果を見きて見さ

なれや深い宮は乃千鳥乱れぬ
浦清乃舟よたのみしまゝつり
罪もなく実もさらぬは清浄の
のるよも心は清浄の仏界を見え
きうあかりたけき